

1  
月号

# いっしん

第487号

令和8年(2026年)

発行：金光教加治木教会 〒899-5213 鹿児島県始良市

加治木町朝日町130発行責任者：矢野文枝 TEL/FAX 0995-62-2895

Mアドレス hittobe.konkaji@gmail.com (HP)http://kajikikon.konjiki.jp/《HPの「いっしん」はカラーで見れます》

新玉の  
年たつごとに  
信心も  
のび榮えてぞ  
花実とはなれ

甘木親教会  
初代教会長  
安武松太郎師御教

立教167年／小倉教会布教141年／甘木親教会布教122年／加治木教会布教75年



※冠雪した桜島と錦江湾・加治木町網掛川河口周辺

今日もまた神のみかげに我ありと  
思えば楽し喜びの春  
喜びは人の心の真なり  
日々を喜び礼びてぞゆけ

写真 大重為映氏

## 令和八年の 新春をお迎え

させていただいて

昨年は、小倉教会布教百四十年記念大祭、甘木親教会二代教会長安武文雄大人三十年祭が仕えられ、神願・師願にお報いさせていただくべく、参拝に御用に、それぞれの立場でおかげを蒙らせていただくことができました。

本年は加治木教会布教七十五年記念大祭を五月十七日(日)にお迎えさせていただきます。

甘木親教会の初代親先生は、ご布教される時、小倉教会の御用が山積していたため、ご布教を一年ほど遅らされました。そのことを小倉教会初代桂松平先生は「わがごとと下り坂は急がん者はないが、うちの安武は、わしが出よと言うても、出んと言う。家には七〇八〇(七八人の家族)を抱えておりながら・・・」と語られたそうです。

これこそ、神願・師願を第一にされる御用(信心)姿勢であります。甘木初代親先生のお示しになられた「真とはご恩を知ってご恩に報いること」というご信心を現わさせていただきたいものです。

(教会長)

## 『私のいただく安武松太郎師』

(矢野政美著 昭和五十六年十二月発行)



安武松太郎師

## 七、母の信念 (その二)

「ご先代（これから恩師のことをご先代と申し上げます。）の百日祭も済み、私も夫婦は御神命のままに、鹿児島県加治木町に布教に出していただくことになり、父母は何くれとなく準備をしてくれましたが、母は特に深い祈りをかけてくれたようにあります。」

いよいよ出発の日（昭和二十六年六月十七日）朝の御祈念後、多くの方々に見送られ、しっかりと御神璽を胸に抱いて、親教会を出発させていただきました。

甘木駅頭に数十名の方が、「万歳、万歳」と見送ってくださいった中に、

母の姿もありました。その時、気丈な母の目にキラッと光るものがありました。

それは喜びと別離の悲しみ、前途を祈る交々の涙であったでありましよう。

それから、出発の折にいただいた御餞別のおかげで、殆んど毎月三日に御礼参拝させていただくと、必ず母が待っていてくれました。そして、自分が少しずつのお小遣いを使わずに貯えて、それを、加治木教会への御献備といって差し出すのでありました。

また、  
「私は身体の具合で汽車に弱いから、加治木にお参りさせていただきたいけれども、それもできないから、先生がこうして親教会にお参りされるから、それを楽しみに待っております」

とも言い、父母ともに、一度も加治木にお引き寄せいただけなかったことが、今思わせていただいても残念に思えるのであります。

母の心中には、「自分も一緒に布教させていただいているのだ」とい

う思いがあったと察せられます。

父は私が布教満四年後、母は五年記念祭の五日前に帰幽させていただきましたが、父母とも、布教当初のことであり、何一つ喜んでいただくこともできなかったことを、今更ながら相済まない思いがするのであります。

私の布教史上に、終生忘れることのできないことがあります。それは、布教満三年が過ぎた昭和二十九年十月十九日のことです。

布教以来三年間、私なりに、一生懸命の気持ちで御用させていただいたつもりでありましたが、布教の実績は遅々として上がらず、お引き寄せいただく氏子もいっこうにその数が増えませんでした。

このようなことから、夫婦とも前途の希望を失ったような気持ちになり、ずいぶん勝手な考えをしたのでした。

それは「どこか他の土地に転地布教をさせていただいたら、もっと御用に立たせていただくことができるのではなからうか」などと、夫婦して語り合った結果、意を決して親教

会にお参りさせていただき、現親先生（二代文雄師）に、いわゆる進退伺いをさせていただいたのでした。十九日の朝、親教会に着かせていただくと、ちょうど母の姿も御結界の前にありました。

何の行事もない時にお参りさせていただいたので、母は心中不審に思ったことであらう。

親先生に一部始終を申し上げ、

「私のような不徳な者では、とうてい御用に使っていただけそうにございせん。勝手なことでありませうけれども、どこか他に転地させていただくわけにはまいりませんでしょうか」とお伺い申し上げますと、親先生はしばらくお考えのごようすでありましたが、

「それはひどかろう。しかし、転地布教というようなことはできない。そのような事情であれば、一応引き揚げてくるのもよかろう。そうして腹が決まったら、また布教に出していただければ良いのだから」と仰せ下さいました。

その時の、親先生のご心情はいかがであられたであらうかと、誠に申

し訳ない思いで一杯であります。

さらに、先代親奥様（初代シケ親奥様）からも、

「それは仕方なかろう。一度帰ってきたがよかろう」との意味のお言葉を頂きました。

その時の私は、率直に言って親教会に引き揚げさせていただくことは、あまり気乗りがしませんでした。

でき得る事なら引き揚げずに、このまま宮崎県あたりに移りたいなどと、虫の良いことを考えていたので、大いに迷いましたが、

「親先生・先代親奥様があのよう仰るのだから、そうさせていただきますくほかに仕方あるまい」と心に思いながら、思い余って実家に母を訪ねました。

母はさきに教会から帰っていました。母の顔を見ると「何事ね」と問うので、母には何もかも打ち明ける心になって、すべてを語らせていただきますと、じっと聞いていた母が、静かに口を開きました。

それは、

「あんたが商売か何かであれば、ここでは思うように行かないから、

他の所に代わるということもよからうが、お道の御用というものはそんなものではなからうと思う。あんたは甘木を出る時、加治木の土になしていたかどうかという決心で行ったのではなかったのですか。その決心はどうしました。加治木で打って鳴らぬ太鼓は、どこで打つても鳴りません。それを鳴らそうと思えば、太鼓のバチが折れるまで、皮が破けるまで打たせていただければ、必ず鳴ります。あんたが一生かかって道が開けんでも良いではないね。あんたが死んだのち、後をついでくださる人が継ぎやすいようにしておけば、それで良いではないね」と、涙ながらに励ましてくれました。

また、そのとき入浴中であつた父も、風呂から上がってきて、その事を聞くと、「あんたは加治木に出していただくときの決心を忘れたのか」と、強く諭してくれました。

そこに私の腹が決まりました。

「それでは、お父さんお母さん、そんなにさせてもらいますから」と答えて家を出ましたが、道路まで母と義姉が見送ってくれました。

母は何度も後ろから、

「辛抱しなさい」「辛抱しなさい」と、繰り返していました。

その時の父母の心、また、親先生、先代親奥様のみ心が、私には痛いほど感じられました。

やがて親教会へ戻り、親先生に、

「心得違いをしておりました、やはり加治木の土にならせていただきます」と申し上げますと、親先生は、

「そうな、そりゃあ良かった」

と喜んでくださり、神様にお願い申し上げて下さいました。

私は往きの憂うつな思いとは打って変わって、明るい心で帰途につかせていただきました。

荷物の整理までして、私の帰りを待ち受けていた家内も、帰った私から事の次第を聞き、「それでは、ここでおかげ頂きましょう」と臍を固めさせていただいたのでありました。それから私は、気持ちも新たに、元気にならせていただきました。それまでは自分の至らなさは知りつつも「この土地が悪い」「この人柄が悪いから」とか、「前の先生が引き揚げられた後だから、御用が難し

い」とか、他に対する不満の心があったが、それが大きな間違いであり、結局至らないのは他人ではなくて自分であると気付かせていただきました。

〈何のこの土地が悪かろうはずがない、天地金乃神様のお土地だもの、人が悪かろうはずがない、天地金乃神様の可愛いみ氏子だもの。〉と考えさせていただくようになり、それから、この土地の繁栄を願う気持ちになり、また、毎朝御祈念後に、前の教会長平島只助師の奥津城に、お参りさせていただくようになりました。

それから徐々におかげを頂き、昭和三十五年十月に現在のお土地を求めさせていただいて、神様をご遷座申し上げたのであります。

また布教当初の頃、このようなこともありました。

最初借らせていただいた家は、一軒建てではありませんでしたが、六坪ばかりの小さな家で、御神前、御結界が四畳半、お広前が四畳半でありました。休ませていただく部屋（ゲイ）をおろして、二畳敷を自分で作らせて

いただく）などを作る費用として、実家に相談したことがありました。

送金を依頼した手紙の返事に、

「送ったが良いか送らないが良いかを、御取次頂いたら、それは送らない方が本人のためと仰せになったから、送らないことにします」という意味のことを書いてきました。

一時は親を恨むような気が起きましたが、送ってやりたいが送ってやれないという親の心の方が、どれほどつらかったであろうかと、後になつてわからせていただいたような次第でした。

この他に挙げれば数限りなくありますが、あれやこれやと思わせていただきますと、私どもの布教の上に、どれほどの父母の祈りがあり、特に母の思いが深かったことかと、ここに布教二十年記念大祭を迎え奉るに当たって、その当時のことが懐かしく思い起こされるのであります。

ある時（母の晩年）義姉（フジ）が母に、「お母さん、お教会の婦人会に出席させていただくと、皆さんが、矢野さんはお母さんがしっかりした信心を頂いておられるからと言



われますけれども、私は、まだお母さんから信心のいちばん大切なところを聞いておりませんが、どこがいちばん大切なところでしょうか、秘訣があったら教えてください」と、問うたことがありました。

母は、

「それはまだ言えない、私が死ぬ前に遺言に残していくから」と答えたと、私に聞かせてくれました。

更にまた、

「私はかねがね、こう思わせていただいている。この家の財産は皆、親先生の御取次によって、親神様からお預かりしたもので、我が物というものは一つも無い。それで、私が死んだ後に、もしお道のことで、全財産を無くすようなことがあっても私は、でかした、ようやくくれたと礼を言います」と「あなたには話せるから」と付け加えて、話したことがありました。

なお、母は常々、

「私は、父さん（主人のこと）より早く死ぬようなことがあってはならないと思っている。父さんが亡くなられたら、その翌日でも良い。そ

うでないと父さんが不自由をされるから」と、また、

「私は、神様からお引き取りいただくときは、農家の忙しくない、人様に迷惑をかけないような時季におかけ頂くようお願い申し上げている」とも語っていました。



晩年の矢野クラ刀自と矢野仁吉郎翁

母の晩年、私が親教会にお引き寄せいただき、母に会いにくくなって、実家を訪れました。ちょうど母は、繭から生糸をひいていましたが、非常に喜んでくれました。

暫くして暇乞いをして家を出まし

たが、峰の原（実家から約六〇〇米）のところまで来ると、もう一度母の顔が見たくなり、引返していったこともありました。何かしら、温かい懐かしい母でありました。

昭和三十年十月二十六日、父は七十五歳をもって安らかに、

「親先生と皆さんに御礼申し上げてくれ」と言い残して、お国替えさせていただきました。

## 八、母の帰幽

父帰幽後の母は、その悲しみの中にも、父の霊の安心を祈るとともに、信心の継承を祈り続けていました。

また、信心のつながりというものは、こんなにも有り難いものかとしみじみ思わせていただくことは、母と嫁と、さらに孫の嫁との仲が、真実の親子のように心のふれ合いがありました。

私の妻（サダ子）も、

「三奈木の実家の父母よりも、堤（私の実家）の方のお父さんお母さんが、ほんとうの親のような気がします」と、折にふれて言っていました。

た。

母はまた、孫たちにも、信心を強いる事はしませんでしたが、心中では、一心にそのことを祈り続けていることを、折にふれて感じさせていたかったです。

孫達が教会にお参りすると、とても嬉しそうに私に語ってくれました。母は、いわゆる七黙三言型で、言葉少なく言うのでありますが、その言葉の中には、引きつけられるほどの、シャンとしたものがありました。

昭和三十一年、加治木布教満五年の年を迎えさせていただきました。母も、心からそのことを喜んでくれ、何くれとなく心を使ってくれていました。

その記念祭を、三月十八日に奉仕させていただくべく、親先生に御取次を頂いて、期日を決定させていただきました。その準備に一同大奮でありましたが、同月十三日夕刻、甘木より至急の電報が届きました。

それは、「ハハシス スグ コイ」という母の死を報せるものでありました。

晴天の霹靂とはこのことを言うの

だろうか。率直に言って、その時の私は驚きと悲しみで、何も彼も投げ出したいような気持ちでありました。

それは、布教五年記念祭を迎えさせていただく内容の中に、親神様、金光様、親先生のみ祈りの千万分の一にも報答し奉りたいとの願いと、これまで陰に陽に布教の力になってくれた母に喜んでいただきたいという一念が、母の死によって絶たれたように思えたからでありました。

取るものも取りあえず、信者であり、また家主でもある松田モト氏に後のことを頼んで、親子三人で夜行列車に乗って甘木へと向かわせていただきました。

十四日の明け方親教会に着かせていただき、母の生前の御礼を申し上げ、実家に駆けつけると、母の遺体は奥の間に安置しており、さながら、スヤスヤと眠っているようで今にも目を覚まして声をかけてくれるような気がするほどでありました。

私は、母と今生のお別れをすべく、御神前の御神酒を頂いて盃に汲み、母の唇を開けて頂かせ、そのお流れを頂いて、

「お母さん、永々とありがとうございました」と、お礼とお別れの言葉を捧げさせていただきました。

母の臨終のようすを聞けば、十三日の朝、「今日はどうも気分が悪い」と言っていたそうですが、夕刻にご不浄に行き、そこで倒れたとのことでした。

「有り難うございます」と、ただ一言、言い残して意識不明になりましたが、約一時間後には、安らかに息を引き取らせていただいたとのことでした。首筋の大動脈が切れたようで、入棺の折、背中一面に紫色の内出血の跡がありました。

実にも、母のかねての願いどおり、主人に先立つことなく、父の帰幽後百三十七日目に、後を追うように身退らせていただき、しかも、その日まで人の手を借りることもなく、農閑期で時候の上にもお繰り合わせ頂き、七十五年の生涯を、ただ、「有り難うございます」との一言を残して閉じさせていただいたのであります。

諡号を、「矢野クラ美真心刀自之霊神」と頂き、葬儀は翌十五日、安

武文雄親先生ご祭主のもとご執行いただき、遺骨は加世熊の墓地に父仁吉郎真萩翁の奥津城と並んで埋葬させていただきました。

母逝きて既に十五年、当教会の布教二十年記念祭を奉迎させていただくに当たって、今更ながら、その当時のことが偲ばれ、今は共に幽冥の安武恩師のみ許にあつて、加治木布教の御用の上に、大きな力となつて働き続けている父母の願い成就のおかげを蒙らせていただきたいと、朝夕祈り続けさせていただいている現在の私であります。

師を偲びおやを偲びて

つづるふみ 政美

(おわり)

昭和五十六年十二月十三日

金光教加治木教会発行

矢野 政美 著

今年、令和八年は加治木教会布教七十五年のお年柄で、五月十七にお仕えさせていただきます。その記念事業として『わたしのいたたく安武松太郎師』（矢野政美著）を加除訂正し、若い人たちにも読みやすい言葉づかいに改め、再版させていただくことを考え準備を進めております。

令和七年十月十八日、木村優斗さんと矢野芳恵さんが、めでたく結婚式を挙行されました。

末長いお幸せをお祈り申し上げます。

※「いっしん」十一月号のおやすみなどでお知らせが遅くなりました。



## あしあと

加治木教会行事記録

12月

- 1 (月) ●報徳月例祭 10時半
- 3 (水) ●甘木親教会御大祭
- 9 (火) 清掃御用 10時
- 10 (水) ●月例祭(主神金光 併せ 10時半)
- 12 (金) 連布教協議会(加治木) 10時半
- 14 (日) 御本部布教功労者報徳祭
- 15 (月) 教誨御用(鹿野所)
- 19 (金) 県教誨師会実行委員会(西本原、長)
- 20 (土) 21 (日) 信徒部 教区委員会(上田)
- 21 (日) 清掃御用 10時
- 22 (月) ●月例祭(天徳寺 共励会 13時半)
- 23 (火) 安武文雄大人立日 御祈念11時
- 28 (日) 甘木親教会 出社教会御礼参拝日
- 29 (月) 清掃御用 10時
- 30 (火) ●越年祭 13時半

## ご霊神様のお立日

一月

- 中村宗吉 之霊神 (4日) 昭和61年
- 松田常衛門 之霊神 (4日) 大正9年
- 星原靖一郎 之霊神 (4日) 令和6年
- 中村正義 之霊神 (5日) 昭和21年
- 内村ハルエ 之霊神 (6日) 昭和59年
- 長尾千津子 之霊神 (7日) 令和5年
- 有馬幸子 之霊神 (9日) 平成16年
- 西本五男 之霊神 (11日) 平成15年
- 濱口マツエ 之霊神 (11日) 平成27年
- 濱口勝次 之霊神 (11日) 昭和27年
- 前田正蔵 之霊神 (13日) 昭和39年
- 瀬戸セミ 之霊神 (14日) 昭和56年
- 小屋敷勝 之霊神 (14日) 平成1年
- 信國鈴子大刀自 之霊神 (20日) 平成5年
- 中島ふさ 之霊神 (20日) 平成16年
- 福山瑞枝 之霊神 (20日) 平成21年
- 山本博敏大人 之霊神 (22日) 令和7年
- 瀬戸俊子 之霊神 (23日) 平成27年
- 柳園義男 之霊神 (24日) 昭和8年
- 本中野イセマツ 之霊神 (25日) 昭和59年
- 岡山エウ 之霊神 (25日) 平成20年
- 桐野仲助 之霊神 (27日) 昭和21年
- 瀬尾 清 之霊神 (27日) 昭和41年
- 向江フキ子 之霊神

ご先祖のご霊神様の、現世・幽冥(かくりよ)までのお働きあつての今日の私たちであります。

立日の月には、故人を偲び、玉串を奉てんしてお礼を申し上げます。

教会では、十日の月例祭時に、ご霊前で霊祭詞が奏上され、玉串の奉てんを準備しています。

一月三日(土)

甘木親教会年頭参拝

一月六日(火)十時半より

加治木教会

少年少女会

鏡開き・七草

※おかがみ餅を焼いてのぜんざいと  
七草たこ焼きを作ります！

一月十日(土) 十時半より

加治木教会 月例祭に併せて

成人感謝祭 奉仕

※成人者、玉串奉奠・記念品授与。

一月二十六日～二月六日

報徳祭奉迎

寒中一斉信行

ご祈念・研修午前十一時  
教話集などを読んでの研修

教会行事

令和八年

1月

- 1 (祝) ●元日祭 正午
- 3 (土) 甘木親教会年頭参拝
- 6 (火) ★少年少女会「鏡開き」10時半
- 9 (金) 清掃御用 10時
- 10 (土) ●月例祭・成人感謝祭10時半
- 21 (水) 清掃御用 10時
- 22 (木) ●月例祭・共励会 13時半
- 23 (土) 少年少女会 年次総会①日 (リポート・  
連合本部 少年少女会 教会長 午後)
- 24 (土) 連合本部 年次総会②日 (教会長 終日)
- 25 (日) 連合会定期総会 (鹿児島 教会にて) 10時半
- 31 (土) 清掃御用 10時

2月

- 1 (日) ●報徳月例祭 10時半
- 3 (火) 甘木親教会参拝日
- 4 (水) 甘木親教会初代立日御祈念 11時
- 8 (日) 多良木教会 報徳祭 11時
- 9 (月) 清掃御用 10時
- 10 (火) ●月例祭 10時半
- 11 (水) 矢野政美大人立日御祈念 11時
- 17 (火) ●甘木親教会 報徳祭 11時
- 18 (水) 甘木親教会「同釜会」
- 21 (土) 清掃御用 10時
- 22 (日) ●加治木教会 報徳祭 11時
- 28 (土) 清掃御用 10時

感 詠 (教会長)

育成も記念事業や目標で  
人が育ちて城と伝えり  
人のこと嫌に思えば吾を恥じ  
己に足りぬ礼びにつとめ  
風邪をひき病気のし損してないか  
おかげたまわることを数えぬ